

わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 92

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

死者との会話

現在、日本における年間の死者数は、110万人を超えている。

この膨大な数字の裏には、同じ数だけのドラマがあり、おびただしい量の涙が流されただろうことを思うと、しばし愕然とするときがある。死者を思い、語りかける。

好きだったものを写真やお位牌の前に並べる。

ふと、今でも道の向こうから歩いてくるのではないかと目を凝らす。

考えてみれば、親しい人や愛する人が死んだあとにその人達を思い出すことは、私達生きている者が少しずつ向こう側の

は心情として無理がある。死んだ人の骨をどうするか、しばしば揉めごとが起こる。私達が骨という体の残骸に執着するのは比べ、欧米人は骨より身に着けていたペンダントや時計などを重宝するという。死んだあとの体

ジョン・フォード監督の映画には、死者の存在を強く感じさせる場面がよくお目見えする。小さな墓に野に咲く花を手向けながら、昔の恋人や戦友に語りかける。あるいは迷いや悩みを死者に打ち明け、自分の老後を相談する――。

談する――。



宗教や民族にかかわらず、多くの人は死者と会話することが日常の中に浸透しているようである。周りに先立つ人が多ければ多いほどその機会も増えていく。

以前、メー

コミュニケーションを取っているかのような錯覚を覚え、心をなごませる。60歳をとくに過ぎたある医者が、90歳の父親を見送った。そのとき彼は、「人って死ぬんだなとはじめて思った。まさか親父が死ぬとは思わなかった」と嘆き、それを聞いて私は心底びっくりした。死を意識しない人生の浅はかさを見る思いがして、返す言葉もなかった。

墓や葬式をどうするか、が近頃話題となる。葬式仏教と呼ばれる寺のあり方も問われている。形はどうでもいい。ただひたすら、死んだ人を想い続けること、語りかけること。

それが一番の供養であり、死を恐れない自分をつくることになる。

イラスト・三浦義雄

にはほとんど未練はないらしく、だから、脳死の受け入れが比較的簡単にできるのだと思う。体を部品のように取り扱うにも躊躇がない。

では死者への思い入れもドライかと思いきや、決してそんなことはない。

決してそんなことはない。